

# たまのよこやま

他館との連携企画報告

平成26年度企画展示

いよいよ佳境!!

# 速報!

東京都埋蔵文化財センターと

# 他館との連携企画!

2014/ 秋

初めての試み! 東京都埋蔵文化財センター × □□□□□! ?

東京都埋蔵文化財センターとコラボしたのは、多摩動物公園と立川防災館です。

午後3時。通常の体験教室では終盤の時間帯ですが、今日はここからがイベントの始まりです。この日、8月23日は、多摩動物公園との連携企画、「夏休み最後の自由研究スペシャルー縄文時代の人々と動物ー」の開催日。この企画は、自然と共に暮らした縄文人の動物との深い関わりを知ってもらおうと企画しました。

普段は殺風景な会議室も、今日は特別仕様です。動物の剥製はくせいや毛皮がところ狭しと並び、縄文人と動物の関わりを示すパネルなどを多数展示しました。当センターでは展示ホールでのギャラリートーク、剥製や毛皮の触察体験を行い、その後、モノレールでナイトズー開催中の多摩動物公園へ。

陽も傾き始め、少し涼しくなった頃、特別ツアーガイド「縄文の森の動物たち」の始まりです。動物解説員による説明を聞きながら、メモを取る子供たち。実は、この日のために特別に作ったワークシートがありました。ワークシートは、イノシシ、シカ、タヌキ・アナグマ、ウサギ、ヘビにイヌを加えた6種類。表は考古学的な設問、裏は動物の仕草などについての設問になっています。一生懸命書き込んだワークシート、夏休みの自由研究に役立ったかな?

陽が完全に沈んだ頃、ハットディテクターを使って、野生のアブラコウモリの会話を聞くことができました。強風などの気象条件によっては聞けないこともあるそうです。最後は、ヘビ（アオダイショウ）に触れて、この日のイベントは終了しました。



これはアオダイショウの抜け殻? (当センターにて)

立川防災館との連携企画「119番の日特別企画 火おこし・消火体験ツアー」を開催したのは、タイトルにもあるように、11月9日でした。立川防災館は、体験学習を通じて災害時の行動や心構えを学ぶことができる防災教育施設です。ここでは、消火器の使い方や放水ホースを使った消火体験、煙の恐ろしさを学ぶ煙体験などを体験しました。119番の日特別企画にちなみ、参加した子供たちは消防服を着て、放水作業を行いました。きっとホンモノの消防士気分を味わえたことでしょう!

一方、当センターでは、人と火の歴史についてのお話や火おこし体験を用意しました。立川防災館では消防服を着ましたが、こちらでは縄文人になりきれ縄文服を着ての火おこし体験です。最初は少し照れもあったようですが、とてもよく似合っていました。舞いぎりやもみぎりを使った火おこしに加えて、火打ち石の使い方とも体験し、実際に火を焚いている竪穴住居も見学しました。

これらの企画は、当センターの新たな試みとして、異なる業種の施設2館と共同で企画・開催したものです。実際に開催してみて、参加者に満足してもらえたところもあれば、新たに見えてきた課題もありました。これらを今後の企画に生かせるよう、取り組んでいきたいと思います。(小西絵美)



消火! (立川防災館にて)

東京都区部を環状に走るJR山手線に、踏切が一つあるのをご存知でしょうか。それは田端駅と駒込駅との間にあります。崖下に位置する田端駅を池袋方面に向って発車した電車は、左に曲がりながら武蔵野台地を開削した切り通しを走り抜けます。その後、両側に広がる町並みが車窓に見え始めた頃、電車は瞬く間にその踏切を通過します。

田端西台通遺跡は、その踏切にさしかかる手前の左側台地上に位置します。台地の高さは海拔23.5mを測り、崖下の低地とは15mほどの比高差があります。遺跡の広がり、東西・南北ともに約450m。面積は125,000㎡で、東京ドーム約2.7個分の広さです。

周辺には数多くの遺跡が分布します。同じ台地上には東方に田端不動坂遺跡（北区No.32）が隣接し、西方は山手線を挟んで中里峽上遺跡（北区No.40）が広がります。北方の台地直下には荒川が形成した沖積低地に带状にのびる中里遺跡（北区No.30）が

位置し、南西方向には谷田川<sup>やたがわ</sup>に向う台地斜面には田端町遺跡<sup>たばたちょういせき</sup>（北区No.31）が存在します。

本遺跡は北区No.41遺跡として東京都の遺跡台帳に登録されていますが、遺跡の存在は、明治35年（1902）には知られていました。発見の端緒はJR山手線の田端駅・池袋駅間の前身である日本鉄道豊島線の建設工事で、開削された台地の斜面に竪穴住居の断面が露呈したことに由来します。

今回の調査地点は、田端高台通り商店街に面した閑静な住宅街の一角にあり、山手線の路線からは至近距離です。調査は6月に始まり12月をもって終了しましたが、弥生時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡22軒と、掘立柱建物の柱穴や土坑・ピットなどを確認・記録しました。時代が判明した住居跡は、弥生時代後期が7軒、古墳時代後期が3軒、奈良時代から平安時代にかけてが10軒です。調査後は整理作業に入り、来年夏に報告書を刊行する予定です。（小島正裕）



弥生時代後期の住居跡（S19）



奈良時代の住居跡（S14）



古墳時代後期の住居跡（S16）



平安時代の住居跡（S111）

# いま あの遺跡は現在！？ Vol.3

## — 国分寺市泉町地区 むさしこくぶんじあといせき 武蔵国分寺跡遺跡北方地区 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査前と現在の写真を比べながら、調査後に遺跡の周辺がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回は JR 西国分寺駅の南西に広がる住宅街、国分寺市泉町地区をご紹介します。

かつてこの場所には「日本国有鉄道中央鉄道学園」がありました。1987年の国鉄民営化に伴い、閉鎖されたその跡地は、再開発により高層住宅地と「武蔵国分寺公園」として整備されています。その整備事業に伴いこの地域の発掘調査が行われました。

この地域は、昔から湧き水の多い地域であり、古くから人々の生活した跡が見つかっています。

この遺跡で特に注目されるのは「東山道武蔵路」の跡が見つかったことです。古代の「東山道」の支道で、上野国こうすけのくにと下野国しもつけのくにから武蔵国府（府中市）に至る幅 12m 程の官道かんりです。朝廷から派遣された官吏使節はこの道を通り、武蔵国府へ向いました。

現在もこの道路跡は遊歩道として整備されており、復元展示施設や説明板もあります。南方の武蔵国分寺跡からも近いので、古代の道を歩きながら歴史散歩するのも面白いでしょう。（武内 啓）



写真1：発掘調査によって現れた東山道武蔵路跡。道の両脇には溝（側溝）が掘られている（写真左）。調査終了後、遺構を残したまま上に舗装が行われ、現在は遊歩道として整備されている。舗装材の色で側溝の跡が示されており、古代の道路跡の様子を今でも見ることが出来る（写真右）。調査前からあった桜の木は現在も残されている。



写真2：遊歩道の北方には、型取りされた道路跡の復元を展示しているスペースがある（写真左）。武蔵国分寺公園から西国分寺駅方面を望む（写真右）。現在も造成工事が行われており、奥のマンション群と造成地の間に遊歩道がある。

# 大江戸掘りものの帖～9～

武家屋敷で描かれた絵付文様？ ～新宿区新小川町遺跡出土のやきものから～

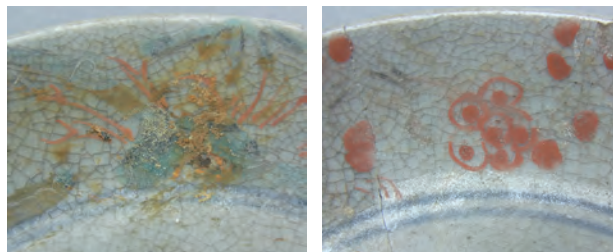
今回紹介するのは、第289集として今年刊行された『新宿区新小川町遺跡Ⅱ』の遺物です。遺跡に冠された町名は、明暦の大火で壊滅的な被害を受けた神田小川町の武家地の移転先として、現JR飯田橋駅手前の神田川右岸に「新小川町」が成立したことに由来すると言われています。当初の拝領者には鷹匠勤めの旗本ないし御家人が多く、幕末まで一貫して同クラスの武家屋敷として利用されました。

遺跡が複数の区画にまたがることもあって、やきものだけでも13万8千点におよぶ膨大な遺物が出土しています。瀬戸・美濃、肥前の二大産地のほか全国の窯業地から一大消費地である江戸に供給されたものが大半でした。しかし江戸においても生産地の側面を持ち合わせていました。土器生産のほとんどは浅草今戸など隅田川沿岸の窯業地が担っていましたし、大名藩邸では藩主の趣向を反映した「御庭焼」の存在も知られていました。今回は、新小川町遺跡のやきものから、武家地におけるより小規模な生産活動の可能性を探ってみたいと思います。

下の写真に掲げた陶磁器は、本焼き後に釉薬の上から文様を描いた「上絵付」のやきものです。とくに注目したいのは、写真手前の陶器碗と左右4枚の磁器皿です。瀬戸・美濃産の腰鑄碗は文様を持たないのがふつうですが、内面には赤色顔料が付着し、外面口縁下には赤色で幾何学文様が加飾されています。また肥前産の磁器染付皿は灰白色素地の厚手の五寸皿で、「くらわんか」と呼ばれるこのタイプの



上絵付で色絵文様が描かれたやきもの（新宿区新小川町遺跡出土）



上絵付後に焼付けを行ったもの 上絵付のみで未焼成のもの  
皿は染付のみで草花などを描くのがふつうです。しかしこの皿の染付文様は見込の圏線のみで、赤・緑・黄色で松竹梅が彩られています。焼成された状態(写真左上)のほか、2点は絵付に触れると顔料が手に付着するほど定着が甘く、絵付け後の焼き付け(焼成)を行っていない状態と解釈しました(写真右上)。当センターの元職員である上條朝宏さんの分析によると、磁器皿の赤色の絵付顔料はベンガラ、腰鑄碗内面に付着した赤色物質は鉛丹、いずれも絵付にも用いられる原材料であることがわかりました。こうしたことから、当遺跡の武家屋敷内で絵付けの作業が行われていたことを想定しました。

遺物の帰属時期は18世紀第3四半期(1750～70年代頃)。同時期の遺跡から、上絵付を想定してキャンバスのように余白を残した染付皿の流通例は知られていませんが、時代が下った文政年間(1818～30)頃には、白磁素地の製品に名所や屋号・商標などを加飾する「江戸絵付」と呼ばれるセミオーダーの製品が登場してきます。低火度で焼き付ける上絵付が可動式の錦窯など比較的簡易な設備でできるため、技術的には都市江戸の武家地においても十分に絵付の作業は可能と言えるでしょう。

一方、窯道具など焼付けの作業に関連した遺物が出土していないこと、定着の甘さが低地遺跡の埋存環境による劣化を一因として否定できないことから、武家地での生産活動の特定には決め手に欠けるのも事実です。今後あらためてやきものの文様の加飾過程と都市域の生産との関わりについては再検証していく必要があります。(大八木謙司・西山博章)【参考文献】成瀬晃司2011「小坏に描かれた商標 江戸のノベルティグッズ」『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会編

職場の環境を清潔に保つことはとても大切なことです。特に当センターのように多くの来館者が訪れる施設にあっては、清掃の重要性は言うまでもありません。今回は当センターで清掃作業に従事している方々を紹介します。作業はリーダーのNさんを中心として、YMさん、YTさんの3人で分担して行っています。

作業は朝8時、まだ大方の職員が出勤していない時間にはじまります。2階と3階の職員事務所



ホールの床を磨き来館者を待つ

廊下などの清掃を入念に行います。来館者が使用するこの空間は特に清潔を保つよう心がけているとのことでした。それと並行して1階や地下1階、また全館のトイレなどの清掃も、それぞれ分刻みで分担して行います。3人全員が、「午前中は本当に忙しい」と口をそろえる所以です。ちなみに、トイレの清掃は一日に3回行っているそうです。



職員事務所を綺麗にする

の掃除に当てられます。ゴミは大きく可燃物と不燃物に分けて回収します。金属、ガラス類、スプレー缶類は別に集めます。なお、資源ゴミとして、ピン類、缶類、紙類を分別して回収しますが、特に紙類はこれらを更に新聞紙、ダンボール、コピー用紙（白黒反故紙）、雑紙（カラー反故紙）に分けています。

を手早くしかも丁寧に終了し、次に2階の玄関や展示ホール、体験コーナー、廊

お昼頃から午後はゴミの収集作業や外回りの清掃、それに喫煙所や給湯室などの

職員の皆さん、ゴミはあらかじめちゃんと分別してから出す、そして、資源化に協力しましょう。あとで分けるのは手間がかかりますので。

このように、清掃作業は当センターの建物および敷地内のほぼすべての空間



資源ゴミや分別ゴミを回収する

がその対象となっていますが、遺物収蔵庫、科学分析室、写真室、保存科学室は例外となっています。なお、Nさんの話では、清掃作業の主な対象は建物の床部分だそうです。雨天日など、外周りの清掃があまりできない場合や午後の空いた時間を利用して、来館者が利用する2階の壁面などを積極的に綺麗にしているとのことでした。ホールの清潔はこのようにして保たれています。

今の季節は落ち葉の掃除が大変です、というYTさんは、以前は老人介護施設で働いていたそうですが、当初センター内の「暗さ」に戸惑ったようです。介護施設では照明は原則すべて点灯させておくのに比べ、当センターでは必要な場所でも、使わない時間帯は消灯しておくのが普通だからです。当センターの節電姿勢にやや感動したようです。

また、給湯室や喫煙所の清掃を担当しているYMさんは、煙草の匂いは



喫煙所の灰皿（缶）を洗う

いささか苦手といいながらも、毎日灰皿（缶）内の吸殻を綺麗にしています。作業の時間帯がちょうど職員の喫煙時と重なってしまうことがあるらしく、工夫してやっているそうです。（福田敏一）

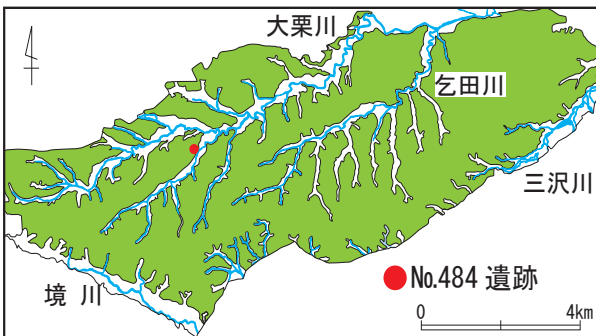
多摩ニュータウンNo.484 遺跡は八王子市南大沢に所在し、地形的には丘陵の尾根上から谷へ向かう傾斜地に位置しており、山林でした。調査面積は4700㎡でした。

発掘調査は昭和58年(1983)の9月から12月まで行い、分布調査などから縄文時代を中心とした遺構・遺物が発見されると予想しておりました。

調査が始まって縄文時代の遺物包含層を掘り始めますと、予想通りに早期土器の破片が多数発見されるようになりました。また、多摩ニュータウン遺跡の多くで見られる落とし穴の性格をもつ土坑が検出されました。

晩秋のころ、尾根に近い緩い斜面地を掘り下げたところから銭が多く発見された、と作業員さんからの報告がありました。すぐに駆けつけてみたところ、写真2のように銅銭が最初は数十枚程度小さなまとまりが発見されました。出土状態図を図化してから、掘り下げてみたところ、また銭が出土したので、まさかと思い竹串を数カ所刺してみました。

結果、殆どの箇所ですべての串が下まで刺せない状態でかなりの数の量の銭が埋まっていることが判明しました。それから竹べらと竹串と手箒てぼうきを使いながらの作



多摩ニュータウンの遺跡業を行ったところ、次第に埋納銭の姿を現しました。その時、予想以上の埋納銭の数に驚き、興奮したことを憶えております。

初めての大量の埋納銭の調査のため、最初は何をしたら良いのか戸惑いましたが、いずれにせよ、正確に図化して取り上げることが心がけました。数日後に突然TBSからの取材があり、翌日夕方のニュースで放送されました。まだ調査中でしたが、報道さ

れたからには、銭の全ての取上げを済ませ、調査事務所のプレハブに置いてあった銭を急遽埋蔵文化財センターに移動することにしました。案の定、放送の翌日、やはりプレハブに侵入した痕跡があり、もしや泥棒に入られたらと思いセンターに持ち帰ったことが幸いしました。

発掘調査も無事終了し、昭和59年1月からは本格的な整理作業に入り、私が銭を担当することになりました。以前、山口県防府市ほうふで銭が調査された下右田遺跡しもみきたいせきの報告書を

たまたま持っていたことから、これをバイブルとしてフル活用し、銭の拓本図と詳細の観察表が大いに助かりました。しかし、No.484 遺跡と下右田遺跡の銭種が違うところがあり、コレクター用の本も参考にしながら渡来銭27015枚のクリーニング、そして分類だったので、毎日残業して数えました。毎晩独りで一枚二枚と番町皿屋敷の如くカウントした苦勞がありました。

どうにか銭の分類も終え年度末に報告を終えましたが、当時、埋納銭の性格について議論がありました。議論される前は後北条の戦ひちくせんに使われた備蓄銭びちくせんだと言われておりましたが、今では考古学界では備蓄銭と呼ばれないで、大量出土銭とか埋納銭と言われるようになりました。

本遺跡の調査の後、全国各地で大量出土銭が発見され始め、埋納時期区分については、慶應義塾大学の故鈴木公雄先生によ



写真1 遺跡遠景写真

って、体系的に分類が行われ、出土銭貨について雑誌の特集号などが見られるようになりました。



写真2 銭貨出土状態

(竹尾 進)

# 『古代びとの祈りとマツリ』《平安時代》



今回の平安時代の展示では、官人がつかさどったマツリ、村々の家のなかで行われたマツリと対照的な二つのマツリの遺跡を取り上げてみました。

## 官人のマツリ

古代中国の制度を倣った日本の律令制は地方統治と支配による中央集権体制を強めていきました。その頃の国の制度を記した「延喜式」<sup>えんぎしき</sup>に基づき、官人によりつかさどられたマツリが古代の地方官衙<sup>かんが</sup>の周辺でも行われるようになりました。官人のつかさどるマツリが天災などの災いを避け、豊作をもたらすことができるという、主導権を表すための一つのかたちであったのです。

そうした当時の状況を示す遺跡が日本各地から発見されています。河川、湧水の流路からマツリに関わる遺物が出土する遺跡が多くあり、墨書土器、<sup>いくし</sup>斎串、木製の形代、刻印された木皿などの都のマツリの遺跡と共通する物が多く出土しており、中央と同じようなマツリが行われていたようです。

古代において、清水が湧き出る湧水や井戸は力が生まれる場所として神聖視されてきました。清らかな水は穢れを流し、湧水の力は悪霊を避け、邪霊を除くと考えられたために、こうした場所が水辺のマツリの場として選ばれました。

東京の多摩地域にもこうしたマツリの遺跡がいくつか発見されており、日野市No. 16 遺跡では、日野台地の裾から湧き出す湧水や流路の周辺から多くの墨書土器、木簡、鳥形、櫛、斎串などが出土しました。この時代、日本の各地では河川、湧水の流路から、墨書土器、斎串、木製の形代、刻印された

木皿などの中央の都のマツリの遺跡と共通する遺物が出土しました。

## 住居のなかの竈マツリ

古代の国の制度である「延喜式」のなかで律令祭祀の一つとして竈神<sup>かまどがみ</sup>にかかわる記述があります。竈神は古代中国では人の生死、家の繁栄に関わる神であり、そうした思想が日本に伝わってきたと言われます。竈神は家を守る神のうちでも中心の神であり、時には火災などの祟りをもたらすとされて恐れうやまわれました。

今のように火を防ぐ方法がなかった古代では火災は恐れられ、その仕組みについても神の祟りのなせるものとして恐れられていたのです。そのため、火災の火元となる竈の周辺ではそうした神を鎮めるマツリが行われました。

その例として古代の住居跡の発掘では、新しく竈を設けると、あるいは竈を廃絶する時に祭祀的な供献を行った跡が発見されることがあります。

多摩ニュータウンNo. 436 遺跡は住居跡の竈の底に蓋がされた小さな甕が埋められておりました。カマドを最初に構築する際に甕に供物などを入れて納めたのでしょう。

多摩ニュータウンNo. 512 遺跡では竈の中央部に3点の土師器<sup>はじきつき</sup>坏と共に鉄釘が出土しました。坏は竈の使用が終わりになったときに供物などが乗せられて箱や台座のようなものの上に置かれたものと考えられます。出土している鉄釘は坏が置かれていた台座のようなものの留め具であったでしょう。

(比田井民子)

日野市No.16 遺跡出土の遺物

鳥形 (左上)、櫛 (左下)、墨書土器 (中央)  
木簡 (右)



墨書の文字は木簡に書かれた文字と字体が類似する



木簡は両脇に複数の穴が開いているため祭祀具のささら (音を出す道具) として使われたことも考えられる

多摩ニュータウンNo.436 遺跡出土の蓋付の小形甕



竈の底に埋められていた 供物を納めていたのであろう



たまのよこやま 99

2015 年 1 月 9 日発行

東京都埋蔵文化財センター

〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2

TEL 042-373-5296

<http://www.tef.or.jp/maibun/>